

統合失調症

群馬大学精神医学教室教授

福田 正人

(聞き手 大西 真)

大西 福田先生、まず、統合失調症とは何かということから教えていただきたいのですけれども、昔は分裂病などと言われたかと思いますが、そのあたりも含めて教えていただけますか。

福田 統合失調症といいますのは精神疾患の一つです。統合失調症という名称のとおり、精神機能の統合が失調をきたすという特徴のある疾患です。以前は精神分裂病という病名でしたが、2002年から統合失調症と呼ばれるようになりました。

大西 現在、日本人ではどの程度の頻度なのでしょうか。

福田 一般人口における頻度は1%弱、およそ0.7%とされています。100人に1人弱ですので、決して珍しい病気ではありません。患者さんが多い疾患です。

大西 男女の比や発症年齢などの特徴はありますか。

福田 男性と女性はだいたい同じぐらいとされています。発症は10代後半から30代前半ぐらいが多く、その意味

で若い世代に始まる病気という特徴があります。

大西 昔と比べて増えているのでしょうか。現状はいかがでしょうか。

福田 頻度は時代によらずあまり変わりません。ただ幸いに、早期受診が進んだり、良い治療が広がったことで、病状は軽症化してきています。

大西 確かに昔はかなり重い方もいましたね。

福田 そういう時代もありました。

大西 この病気の発病の原因のようなものは何かわかっているのでしょうか。

福田 究極的な原因はよくわかっていませんが、思春期や青年期のようにこれから社会に出ていくという時期が発症のきっかけになることが知られています。

大西 そういう場合、何か知られているきっかけなどはあるのですか。そういうものもわからない場合もあるのでしょうか。

福田 臨床的にはっきりしない場合

も一部はありますが、例えば進学や就職のように生活環境や社会環境が変わり、それがストレスとして強く働くことがきっかけになることが多いようです。

大西 次に、臨床の現場で見つけるコツといますか、どんな症状に着目して診断していったらよいのでしょうか。

福田 統合失調症の症状として特徴的なのは幻覚や妄想です。統合失調症の幻覚や妄想には特徴があります。幻覚については、幻聴、つまり耳に聞こえるかたちの幻覚、しかも声の幻聴という特徴がありますので、幻声と呼ぶ場合もあります。他人が自分について悪く言ってくるという内容が多く認められます。妄想には様々なものがありますが、他人が自分に対して何か悪いことをしてくるという内容が共通する特徴となっています。このようにして、幻覚にしても妄想にしても、他人が自分に働きかけてくるという内容ですので、人間関係がテーマになっています。その他人が自分に悪いことを言う、してくるという内容の特徴があることからわかりますように、自分自身についての他人からの評価がテーマになっていることが、統合失調症の幻覚や妄想の特徴になります。

大西 企業の産業医をやっていると、そういう相談を持ちかけられることもあります。最初、本当なのかどうか、

よくわからない部分もありますけれども、それはどのように判断していったらよいのでしょうか。

福田 相談の内容について事実かどうかを確認できる情報を集めることもあります。大切なのは、本人が何を根拠にそのように思っているかです。多くの方が納得できるしっかりした根拠があってそう思っているのか、それとも、根拠はあまりはっきりしないのだけれども、本人は固く信じてしまっているのかということです。根拠が曖昧な場合には妄想の可能性が高くなりますので、そうした本人の訴えの根拠に基づいて判断していくこととなります。

大西 そうしますと、正しい診断に持っていくにはどのようなプロセスを経たらよいのでしょうか。

福田 これは精神疾患一般に当てはまることですが、何か検査をしてその結果に基づいて診断ができるというのですが、残念ながら、統合失調症を含めて精神疾患については血液検査とかレントゲン検査の結果に基づいて診断できるという訳にはいきません。その代わりに、丹念に症状をお聞きして、その経過としての病歴もお聞きして、それに基づいて診断することになります。

大西 診断基準がある場合もあるかと思いますが、そのようなものはいかがでしょうか。

福田 診断基準がありチェックリスト風になっていますが、精神科のトレーニングを積んだ専門家が使うことが前提になっています。よくご存じない方が使いますと判断を誤ってしまうことが懸念されます。

大西 そうしますと、むしろいかに適切に専門医に相談するかというタイミングも重要かと思えますけれども。

福田 そこが大切だろうと思えます。

大西 そのあたりのタイミングといえますか、ポイントはいかがでしょうか。

福田 統合失調症について、専門家ではない方が治療に当たられるのは難しいと思います。先ほど説明したような、特徴のある幻覚とか妄想があるという患者さんがいたら、専門家にご紹介いただきたいと思います。

大西 早めに精神科の先生にコンサルトするということですね。

福田 はい。

大西 それでは、次に治療のことをうかがいたいのですが、まず薬物療法は今かなり進歩してきているのでしょうか。

福田 統合失調症に使う治療薬のことを抗精神病薬といいます。この抗精神病薬については、様々な進歩がありましたので、以前よりも効果が上がるようになってきています。

もう一つ大切なことは、早期診断、早期治療がポイントだということです。

これは統合失調症に限らず、どの疾患でも同じだろうと思いますが、早い段階で発見して、その段階で治療すれば、改善も速やかだし、予後も良い。このことは、精神疾患にも共通しています。統合失調症については、幻覚や妄想を体験するようになってから実際に治療を受けるまでの期間がかなり長く、場合によっては年単位のこともあることが知られています。そうならず、なるべく早く気づいてなるべく早く適切な治療に入ることが大切です。それにより、治療の効果も上がりやすくなりますし、予後も改善します。

大西 薬物療法での最近の進歩みたいなものはあるのでしょうか。

福田 薬物療法につきましては、従来の抗精神病薬は眠気や鎮静効果がある薬物が多く、それを治療作用としても用いていましたが、そうした鎮静作用がなるべく少ない薬物が使えるようになってきました。また、通常の薬物療法によっては難治な方、良くならない方がいますが、そういう方に有効性の高い薬物も利用できるようになってきました。

大西 薬物以外のいろいろな治療もあるかと思えますけれども、どのようなものがありますか。

福田 先生がおっしゃるとおり、薬物療法だけではないところが大切で、そうした治療を総称して心理社会的治療といいます。本人が自信を持って希

望を持って人生を生きていく、そのうえでストレスに対する対処法を身につけていく、そういうことが大切だとわられています。実際そういう取り組みを通じて社会復帰される方が非常に増えているということが最近の特徴だと思います。

大西 そうしますと、薬物療法に加えて、社会心理的な治療も重要だということですね。あとは、よく最近、精神外科という言葉も聞くのですけれども、そういった治療は何か試されているのでしょうか。

福田 統合失調症につきましては、治療法が乏しかった時代にはそうした治療が行われたこともありましたが、現在ではそういう治療は行われていません。

大西 あまり行われていないということですね。経過と予後に関してうかがいたいのですが、先ほどのお話ですと、早め早めに介入するとかなりよくなるということですが、そのあたりはかなり健常に近い状況まで持っていけるのでしょうか。

福田 そんなふうに回復される方が増えてきています。最近のトピックとしまして、ご自身が統合失調症を持っていることをオープンにされた有名人の方がいらっしゃるということがあります。お笑いコンビの松本ハウスのハウス加賀谷さんという方が、統合失調症を患っていることをオープンにして、

その体験を本にして公表されました。そうしたことは患者さんに勇気をもたらしますし、家族など身近な方にとっても希望を与えています。

大西 それは非常に励みになりますね。あとは、少し高齢の方では何か気をつけることはありますか。認知障害と少しダブったりすることもあるのでしょうか。

福田 お年を召しますと、身体疾患を合併することが増えてきます。そういった体の病気への対処がトピックになっています。といいますのは、統合失調症という病気の影響で、どうしても自身の健康管理が苦手になってしまう方が多く、そのため統合失調症の方は寿命が短くなってしまふことが知られているからです。つまり病気の影響でご自身の健康を管理することが十分できなくなってしまうわけです。そうしたことから、医療側からの支援によってご自身の健康管理の力を高める、それによって寿命が短くなることをなくしていこうという取り組みが始まってきています。

大西 以前ですと、相当重い方もお見受けしたこともあるのですけれども、最近ではそういう方は減ってきているということなののでしょうか。

福田 はい。もちろん、残念ながら一部にはそうした病状が重い方もいらっしゃいますが、先ほど言いましたように、早期に発見して、良い治療を提

供することで、例えば入院をされる方は減っていますし、入院の期間についても短くなってきているなど、以前とは随分変わってきています。

大西 最後に、文化的な違いと申しますか、病像に対して、欧米と日本と何かそういう文化的な背景で違うということはあるのでしょうか。

福田 全体としてはあまり変わらないと言ってよろしいかと思います。病気をもちのをご自身で公表することが日本ではようやく著名人でも始まりましたが、世界的にはノーベル経済学賞を受賞したナッシュという方が、統合失調症をお持ちであることをオー

ブンにしています。そのようにして、一般の方が統合失調症のことをよく知る機会が増え、回復した姿というモデルを目にする当事者や家族が希望を持てるようになることが、今後の日本のあるべき姿だと思います。

大西 そうすると、世の中の方々の病気に対する理解も深まっていくということですね。

福田 そうですね。

大西 どうもありがとうございました。

参考図書

『統合失調症』(医学書院 2013)